

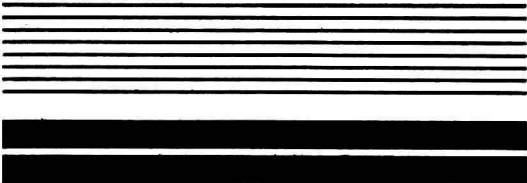
日本文学全集
48

埴谷雄高・安部公房

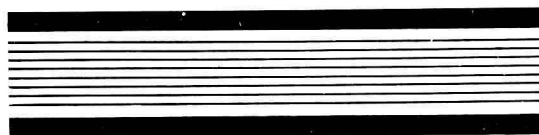


死霊・榎本武揚

河出書房



埴谷雄高・安部公房



カラー版日本文学全集 48

1971©

昭和四十六年九月二十日 初版印刷
昭和四十六年九月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 埴谷雄高・安部公房

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

埴谷雄高

死靈

安部公房

榎本武揚

注釈	小久保実	三五
年譜	埴谷雄高	二七
	白川正芳	二七
	菊地弘	三五
解説	加賀乙彦	三三
巻頭写真	畔田藤治	
色刷挿画	死靈	
	佐藤昌美	
	榎本武揚	
	永田力	

埴谷雄高

死

靈*

自序

ここにやっと序曲のみまとまったこの作品について、その意図を述べるつもりはない。けれども、この作品が非現実の場所を選んだ理由については一応触れておきたい。開巻冒頭にこの世界にあり得ぬ永久運動の時計台を掲げたのは、*nowhere, nobody*の場所から出発したかったためであり、また、そのような小さな実験室を設定することなしにこの作品は一步も踏み出し得なかったのだから。

非現実——この言葉はそれ自身多くの問題を含んでいる。私自身の解釈によればこうである。そこは虚妄と真実が混沌たる一つにからみあった狭い、しかも、底知れぬ灰色の領域であって、厳密に言えば、世界像の新たな次元へ迫る試みが一步を踏み出さんとしたまま、はたと停止している地点である。謂わば、夢と覚醒の間に横たわる幅狭い地点である。私はかかる地点を愛する。けれども、また同時にかかる地点から一步も踏み出し得ない自身に私は苛らだつ。私はそこから一步も踏み出したくない。にもかかわらず、私はその一步を踏み出さねばならない。

一種ひねくれた論理癖が私にある。胸を敲つ一つの感銘より思考をそそる一つの発想を好む馬鹿げた性癖である。極端にいえば、私にとっては凡てのものがひややかな抽象名詞に見える。勿論、そこから宇宙の涯へまで拡がるほどの優れた発想は深い感動からのみ起ることを私は知っている。水面に落ちた一つの石が次第に拡がりゆく無数の輪を描きだす音楽的な美しさを私は知っている。にもかかわらず、私は

出来得べくんば一つの巨大な単音、一つの凝集体、一つの発想のみを求める。もしこの宇宙の一切がそれ以上にもそれ以下にも拡がり得ぬ一つの言葉に結晶して、しかもその一語をきっぱり叫び得たとしたら——そのマラルメ的願望がたとえ一瞬たりとも私に充たされ得たとしたら、こんなならだらと長い作品など徒らに書きつづらなくとも済むだろう。私はひたすらその一語のみを求める。けれども、恐らくその出発点が間違っている私にはその一つの言葉、その一つの宇宙的結晶体はつねに髪一筋向うに逃げゆく影である。架空の一点である。ついに息切れた身をはたと立ち止まらせる私は、或るときは呻くがごとく咏嘆し、また或るときは限りもなく苛らだつ。そして、ついにまたまった言葉となり得ぬ何がそのとき棘のような感嘆詞となつて私から奔しり出る。即ち、*ach*と *hein*——私にとって魂より奔しり出る感情はこの二つしかなく、ただそのみを私は乱用する。

このような忌むべき事態は、勿論、私個人の歪んだ能力に由来するに違いない。と同時に、そこには私達が置かれた不幸な位置というものもある。例えば、『大審問官』*を讀むとき私が肌身に覚えるのはそのような荒涼たる場所である。説き去り説き来つて懸河のごとく弁証する大審問官に対してキリストは最後まで黙して答えない。*Dix*（説き終つた）という言葉が吐かれたとき、キリストははじめて永年の霜を置いたような大審問官の唇にびくりと接吻する。偉大なる憂愁につつまれた大審問官の魂がそのとき雷撃をうけたように震撼する。その魂は確かに震撼せざるを得ない。何故ならキリストの無言の接吻のなかには瞑想と殉教と流血に積み上げられた数千年の歴史が結晶しているのだから。そして、そのとき、私達は知る、『大審問官』の作者の苦悩が如何に深く強烈なものであれ、彼はなお（私達と較べてより強烈に幸福なことには）腕をうちおろせばちゃんと敵あたつてはねかえる数千年の堅固な実体の上に支えられていることを。もしこの私達が一つの底知れぬ重味をもつて沈黙しつづけるキリストを描くとすれば、その作品中に数千年にわたつて積み上げられた歴史をも創り出し

てみせねばならない。それは疑いもなく不可能である。私達は巨大な幅広い人類史のなかに投げこまれた一匹の哀れな鼠のごとくにデモクリトスからヘゲルへ至るまでの膨大な積荷の間をちよこちよこ嚙り歩いた。けれども、一つの積荷からほろくずをひきずりだすごとくに忽慌とつつ走り、一つの断片のみを口に含んで踊った私達はいまだにその一つ一つの味を詳らかにせぬ。私達はちやちなソクラテスであると同時にちやちなソフィストの徒であり、一瞬合理的でまた一瞬非合理的で——要するに単純素朴なてんやわんやなのであって、一貫せる論理的思考の持続にはとうてい耐え得られぬというのが私達の精神の位置である。けれども、私達の不幸は私達が毅然確固たる実体の上に立脚していないことではない。もし私達が風のごとき気分の方にまかせせる単なるてんやわんやの徒であるならば、そこにはまた不幸な事態も幸福な境地も何ら問題になり得ないだろう。私達にとっての不幸は、私達がその発想を最後までつきつめ得ぬてんやわんやの徒であるにもかかわらず、なお私達に一定の受容能力が備っているという一点にある。大審問官の論証を自ら築き得ぬにもかかわらず、その偉大なる憂愁はその皮膚に感得される——これが私達を未来へひきずりゆく不幸である。

それは前へひきずりゆく不幸である。苦難な未来へ踏み出さなければならぬ不幸である。とうてい動かし得ぬ手足をなお動かさなければならぬ不幸である。私個人についていえば、私は『大審問官』の作者から、文学が一つの形而上学たり得ることを学んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと云い得る。私は彼の酷しい眼を感じる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を読んだというだけで私は彼への無限の責任を感ぜざるを得ないのである。それは如何に耐えがたい責任であることだろう、とうてい不可能な一歩をしかも踏み出さねばならぬということは。私はついにせめて一つの観念小説なりともでつち上げねばならぬと思ひ至った。やけのやんばちである。けれども、その無暴な試みの如何に羸弱なことであるだろう。例えば、私が

この作品中に扱った『虚体』という馬鹿げた観念をとり出してみてよい。この僅か一語に到達するために、私には私なりの苦勞がなかった訳ではない。けれども、ひとたびその語が白紙の上に書き下されてしまえば、それは他のさまざまな観念のなかに泡のごとく消え失せてしまつてはや跡形もない。微風のなかに揺れている一本の枯れた樹ほどの持続する表現力も持ち得ないのである。重味なき観念のもろさである。とはいえ、私はその脆い砕けた場所から出発せねばならぬ。

このような荒涼たる場所に置かれたとき先人達が如何なる方法をとったかを見たとき、私には一つの姿勢が目にとまった。そこにはさまざまな型があり、或るものはそこで地上に密着する鮮苦植物的に生きのびていたが、或るものははじめから枯死の擬態をとって立っていた。擬態——そうである。特殊な風土のなかにとにかく一本の樹幹を延ばした形で立っているその姿勢に擬態という名称を附して恐らく誤りではないだろう。死んだ真似でもしていなければとうてい自身が持ちきれなかった彼等の精神に深い興味を覚えたばかりでなく、遺憾なことには、私はそうした姿勢に親近性のみ感じた。そうである。それは遺憾な親近性であった。何故ならベコンによって既に数世紀前に撃破された洞窟の偶像がなお私達の裡にとぐろを捲いているのを私は感じたから。けれども、いうことはまた同時に、うまく死んだふりをしてみせる隠れ義を私自身たとえ神の目を盗んででも案出すべきやけのやんばちな衝動を感じたということもまったく同じことであった。その遺憾なやけのやんばち的心情の分析にはここでははたしめる必要もない。私が敢えてここで触れたいのはその結末の姿勢だけである。その結果、私がとったのは次の三つの方法なのであった。即ち、極端化と曖昧化と神秘化——。

前述したごとく私には一種ひねくれた論理癖がある。せめて徹底出来るところまで踏みこみたい。もし不可能ならば、ごまかしてでも通りぬけたい。ごまかしが見抜かれてもなんとか灰色のヴェールをかぶ

せておけ。以上が私を支えている体系である。こんなたよりない中世の呪術的方程式に従つてとにかく私流の一貫性を保っているのが、私の示し得る唯一の姿勢なのであった。明晰と厳密——いまだ私の精神を飾っていないその協和音を渴し求めている訳ではないけれども。この場合、あとに並べられた二つの方法は謂はば比較的單純な擬態法であつて殆んど説明を要しない。つまり、作中隨所に見られるごとく、*misogynism*の濫用、反覆の濫用、或る期間までの心理描写の省略、探偵小説の構成等々々。けれども、第一にとりあげられた極端化の方法については、非現実の場所をこの作品が出發する場所と述べた以上その大要を説明しておかねばならぬ。一般的にいつて、思考は本来事物の根源と極限へまでひたすら迫りゆくものであるから、敢えて極端化と呼ぶまでも、思考本来の道行きをそのまま迫りゆけば、屢々、いわゆる思考實驗の領域へまで踏みこむに至るのだらう。私のひそかな願望はかかる実験をこゝで行いたいということのみにかかつている。けれども、ひねくれたちやちやな論辯しかもたぬ私はただ私流の極端化の原則を歪んだ形で貫徹ばかりである。屢々私が行うそれは、もしそういつてよければ、妄想實驗の領域に属すると規定して好い類のものである。そうである。そして、それはそれ以外の何物でもない。そして、このような愚かしき無力な実験遂行の故にこそ非現実の場所から私は出發しなければならなかつたのである。

嘗て耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古来より現在までもひきつづいてゐる戒律酷しい一教団であつて、嘗て私が述べるような事実など存しなかつたが、私は私自身の法則に従つてその素朴な教儀を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮び上つてきたヴィジョンとはこうである。その教団はその頭顱死教団といわれていた。着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその信徒達は禁ぜられていた。従つて、教団の信徒達が集り籠っている或る高山へ登りゆくと、その途上の此処彼処にミイラ化し或いは風化したひとびとの屍体が無数に見受けら

れた。けれども、如何なる理由によるのか、該教団の始祖大雄のみは深く暗い洞窟の奥にその瞑想的な眼を光らせて生きていた。菩提樹の下で釈迦が正覚し無窮の碧空を眺めあげたとき、ふと思い出したのがこの大雄である。(事實に於いては彼等の年代は遺憾ながらややずれていて彼等は互いに相知らなかつたが、私の極端化の法則はここでも時間的、空間的な事實の拘束など無視する。) ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむつたその高山へ迫り着いた釈迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで静かに進んでゆく……。これが私のヴィジョンの出發点である。この釈迦と大雄の對話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現われる筈であつて、この作品全体の觀念の中心をなしている。この作品が非現実の場所から出發するというとき、その設定には、登場人物達がフィルム of 陰画のごとく暗く処理されるという意味も含められているのであるが、かかるネガティブな作中人物達の中心に坐っているのが全否定者大雄なのであつて、彼等は彼の觀念の部分をそれぞれ担つて歩いているに過ぎない。

さて、そうであるとして――

宇宙の涯から涯へまで響きゆく一つの巨大な単音の幅を検証すること、それは確かに一つのヴィジョンに他なるまい。それは確かにあらゆる先人達をひきずり歩ませた一つの光源に他なるまい。けれども、もしこの光榮ある用語があまりに暗過ぎる私の領域に似合はしからぬとすれば、私は私自身の用語をもつて、それを一つの架空凝視と名づけても好いのである。私の魂は、広大な真空の一点にはたと立ち止まる。私は、架空を凝視する。そして、そこに行われる一種の精神の体操、私はここに設定された小さな実験室がもつ意味をそれ以上に予定してゐない。巨大なサイクロトロンやダイナモが旋回する現代、ものものしいランビキやフラスコをこたごたと並べたてて効果零の古ぼけた錬金術にとりかかった以上、その他につけ加えるべき意味などあり得ないのである。

私が本巻を序曲と呼ぶ理由は、てんやわんやの息切れする能力をも

ってとにかく三つの主導音をここに敲ったというだけの理由である。第一から第三主題の展開へいたるまで。だが、まだ何事もはじまっていないのである。この作品が扱うのは五日間の出来事であるが、だから長いスタイルで書きつづけているため、この序曲を終つてようやく第一日目の夕方まで達したに過ぎない。徹夜など気にもかけず飛びまわりたがる作中人物達の気配を窺い看るとき、前途の遙かさにいささか恐慌の情を禁じ得ない。

悪意と深淵の間に彷徨いつつ

宇宙のごとく

私語する死霊達

一

最近の記録には嘗て存在しなかったといわれるほどの激しい、不気味な暑気がつき、そのため、自然的にも社会的にも不吉な事件が相次いで起った或る夏も終りの或る曇った、蒸暑い日の午前、××風癪病院の古風な正門を、一人の瘦せぎすな長身の青年が通り過ぎた。

青年は、広い柱廊風な玄関の敷石を昇りかけて、ふと立ち止った。

人影もなく静謐な寂寥たる構内へ澄んだ響きをたてて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。青年は凝つと塔を眺めあげた。その大時計はかなり風変わりなものであった。石造の四角な枠に囲まれた大時計の文字盤には、ラテン数字でなく、一種の絵模様を描かれていた。注意深く観察してみるならば、それは東洋に於ける優れた時の象徴——十二支の獣の形をとっていることが明らかにあった。青年は暫くその異風な大時計を眺めたのち、玄関から廊下へすり抜けて行った。

この青年、三輪与志が郊外にある××風癪病院を数度にわたって訪れなければならなくなった用件というのは、彼の嘗ての親友で、またその後、兄の知人ともなったらしい或る不幸な、孤独な精神病者の委託についてであった。幸いなことに、この病院に勤務している一人の若い医師が、三輪与志の兄三輪高志の学生時代の顔見知りであったの

で、患者の委託についてさまざまな便宜をはかってくれたばかりでなく、進んで患者の担任をすらひき受けてくれたのであった。

その不幸な精神病者は、やはり郊外にある刑務所のなかで、不明瞭な原因から急に狂気の徴候を表示したというのである。狂気の徴候を表わしたといっても、見廻りの看守に発作的な暴行を加えたとか、なにか妄想に憑かれて曖昧な言葉を述べはじめたという訳ではなかった。昔から黙りがちな青年であったが、その刑務所へ送置されてから次第に深い沈鬱状態に陥り、遂に全くの無言状態をつづけるに至ったといわれている。それは一種の言語喪失の症状なのであるが、通常の健康状態を保っていた以前から沈黙がちなもの静かな青年であっただけに、何時頃から彼を発狂者として認定すべきか、書類作成に際して担当係員も少なからず困惑したとのことであった。

彼の狂気をはじめて問題になったのは、或る蒸し暑い日の午後、温厚な人格者であると評判されていたかなり老人の刑務所長が未決囚達の房を各個に見廻って、暑さへ向つての健康について二三の注意を与え、未決囚達の独居生活を元気づけて歩いた際、彼がその老所長に対して失礼な振舞いをしたことから端を発したといわれていた。然し、温情をその全生涯の標語としてきたという老所長を無視したような粗暴な言動が示されたのではなく、老所長が独房内に端座している彼に丁寧に話しかけたとき異常に噉いはじめただけだといふ話もあった。しかも、この停年前の老刑務所長はあまりに穏やかすぎてなにかしらからかつてみたこともない人物だとの噂も他方にあり、彼は黙ったまま奇怪な様子で嚇しつけたのだと、真実らしく述べる者もあった。

これらの話は、三輪与志が、仮釈放される兄の荷物を待合室まで運んできた雑役夫達から聞いたのである。とにかく老所長の訪問に際して事件があったことだけは確かであった。老所長は直ちに担当看守を呼びつけ、このような状態に至るまで無責任に放置しておいた怠慢振りを叱ったそうである。三輪与志が看守長から聞いた話によると、老所長はその場から自ら医務室へ赴いて、『国家から保護を委託されて

いる大切な人物』について、医師達と心からなる相談をこらしたとのことである。医師達の診察が行われると、しかし奇妙なことに、一人の医師が、彼には失語症の傾向もまた重い気鬱症の徴候も認められず、全体としてならん発狂の症状はないと、強硬に主張したそうである。それなのに、如何なる理由でか、彼はやがて刑務所内の一病舎へ移管されたのであった。一年以上の長い期間其処へ放置されていたのであるが、彼がその病舎でいかなる扱いを受けていたかは明らかでない。

此処で注意して置かねばならぬことは、やはりその同一病舎に病臥していた三輪与志の兄三輪高志が、病状の進行の結果、執行停止となり仮釈放されたのが、不幸な精神病患者、矢場徹吾がその病舎へ送られていたその期間内であったということである。

さて、三輪与志と矢場徹吾の關係についてちょっと説明しておこう。

矢場徹吾が高等学校を去った理由には、やや不明瞭なものがあつた。学校当局がその事件に対し処置した決定は恐らく正当であつたろうが、失踪に際しての矢場徹吾の心理が説明しがたいものであつた。或る秋の午後であつた。町から学校の寄宿舎への帰途、黄ばんだ葉をつけた樹々の密生している公園の境にさしかかつて、三輪与志と矢場徹吾はふと佇んだ。動物がそれによつてなりたつていような気味悪く訴える低い、地を這うような締めつけるような、唸り声が公園のなかから聞えてきた。二人は重苦しく顔を見合わせると、既にかなりの人々が足を止め、粗らかな円をつくつていゝるその場へ近づいて行つた。

クレチン病^{*}を患つて畸形に発達した子供にこんな風貌があるといわれる。一瞥しただけで、奇怪な印象を受ける子供であつた。頭から眼、鼻、口、さらに軀幹と、その凡てが正常な釣合ひがとれぬというより各自がそれ自身の奇怪な個性をもつて勝手に発達しきつたふうに見える……。愚鈍と一瞬にして深く印象されるが、それにしてもなに

か厭らしい不気味な後味がそこに残つた。そんな子供が一匹の大きな老犬をむごく扱つていたのであつた。

まだ六つ位にしか見えなかつたが、痙攣するような激しい力で、殆んど自身と同じ背丈の大きな老犬の耳をひっぱつていた。その子供は苔のたまつた白っぽい舌を垂れていた。そして、老犬の苦しげな唸り声が奔しるような悲鳴へ高まると踊り上つて嬉しげにその両足を踏みしめた。そんなとき、その子供の鈍い瞳は生き生きと光つてさへ見えた。哀れな老犬の哀れな耳朶は、ちぎれるばかりに張りつめられていた。しかも、耳朶の上部に赤黒い皮膚病のかさぶたが一つの乾いた隆起を形造り、哀れな老犬の衰れた風体を、さらに悲惨にしていた。その老犬は、このような苛酷な扱いに日頃から慣らされているのか、何時までも、凝つと身動きもせずじまゝ立っていた。然し、激しい苦痛にはやはり耐えきれなかつたのである。首を前方へ持ちあげ悲しげにしばたかせる乳白の瞳が霑んでくると——大粒の涙が湧き出てきた。……その表情の推移は、殆んど一人のうしろひしがれた人間の激しい苦悩を連想させた。

すると、事態が變つた。閃くように子供の傍らへ進みよると、気味悪げに眺めている人々があつたという間もなく矢場徹吾はその子供の耳朶を両手で把んで引きあげた。足が地上から離れもせず、自身の重さにぶらさがるといつたふうに、その子供の軀は矢場徹吾の胸脇へずるずると引きよせられる格構になつたのである。それは悲鳴をあげる瞬間もないほどの出来事であつた。悲鳴どころか急激な驚愕のため子供は微かな声すら出せない様子であつた。異様な瞬間であつた。蒼黒い皮膚の顔面全体が一度真蒼になつて、そして、首筋のあたりからまた次第に赤く染まつてゆく経過が、はっきりと見えた。……不意に怖ろしい悲鳴が子供の咽喉元から奔しりだした。奇妙なことに一瞬犬の悲鳴とまつた同一のようになつた。奇しくも、また、まるきり違つた叫びでもあつた。そのとき、矢場徹吾は子供の軀をぐいと宙天へつりあげて、烈しい音が響きわたるほど頬のあたりを続けさまに殴りつけ、そし

で、不意に前後もなく子供の軀を投げ出した。空間で異様に反つてくると一回転したように見えた子供の軀は、瞳をしばたかせたまま立ち去りもせずその傍らになお見上げている窺れた老犬の背を掠めて、仰向けのままどたりと地面へ崩れ落ちた。

それら一切は殆んど瞬間の裡に行われた。というより、そこに或る考えをまとめることも出来ないような時間のなかに行われた一つの出来事であった。

氣狂い！と激しく叫んだ声に、三輪与志は、ふと周囲を眺めまわした。それまで彼は、老犬と子供を囲んだ人々の後ろに臆病そうに佇んでいる、この町に見慣れぬけばけいしい服装をした一人の少女を眺めていたのであった。彼女はびつたりと身について断截された青味を帯びた服装の下で、微かに顔をえづづけていた。哀れに呻る老犬のうちひしがれた表情は彼女をすっかり抱えているようであった。両手の拳は強く握りしめられ、老犬の高い締めつけられるような唸り声とともに、強く張った胸のあたりまでその拳は持ちあげられた。大きく見開いた瞳の下には、喘いだように震える口が微かに開かれていた。矢場徹吾が子供の耳朶を掴んでひきあげたときの彼女の表情を、三輪与志ははっきりと憶えていた。不意と大きく開かれた口を覆うように、彼女は握りしめた小さな拳を強く口辺へ押しつけた。それは、悩ましいほど極度に怯えた幼い子供の表情なのであった。

彼女は不安そうに新たな事態を見守った。氣狂い！と叫んだのは丈が低く首筋の太い四十年配の男で、激しい興奮に両腕を打振りながら、周囲の人々を掻きわけて進み出てきたが、矢場徹吾と正面から向き合おうと、ちょっとひるんだように口ごもってその言葉を無理にひきだすふうに一言だけ怒鳴った。

——卑劣漢！

すると、矢場徹吾はその男を正面から見返しながら低い声で、然し、きっぱりと云った。

——僕は、矢場徹吾……高等学校の学生です。

瞬間、しんとした氣配になった。丈の低い四十年配の男は困惑した顔を人々の方へ向けた。そのこわばってぶるぶるひきつった顔は人々の間に救いを求めていた。興奮のあまりその場へ飛び出したものの、彼はその後をどう扱って好いか解らなかつたのである。

予想されたような陰悪な事件も起らずに鎮まった人々を後に、矢場徹吾と三輪与志の二人は肩を並べて公園のはずれへ歩き去った。

その日の夕暮であった。校庭の諸所に集っている寄宿生達の間に一つの動揺が起った。高等学校は堅固な石塀によって囲まれていたが、運動場の後方の丘陵地帯へ展いた僅かな部分は、木柵によって区切られていた。この木柵を乗り越えて、一人の少女が校庭へ入ってきたのであった。その少女は学生達の姿にためらいながら、それでも決心したような確固たる足取りで校庭の中央へ近づくと、明瞭な口調で一人の学生へ問いかけた。その質問が、矢場徹吾に就いてなのであった。

問われた男は学内に權威を振っていた如何なる運動部にも所属していなかったけれども、鉄棒の大車輪が得意で、明るく放胆な性格から一種の風紀を寄宿舎内に保持している男であった。運動場の木柵をどんな様子で乗り越えて彼女が入りこんできたか解らなかつたが、彼女の華かな服装が、彼の興味をひいた。

——矢場は、確か舎監室に呼ばれてる筈です。三輪も一緒です。ちえっ！ 奴等は何時も一緒なんです。何しろ風変わりな奴等ですからね。だが、貴方はどうして木柵など乗り越えて……正門の受付から入ってこなかつたのですか。

——矢場さん……矢場徹吾さんという方はこちらにおられるのでしょうか。

矢場徹吾に就いて既に訊きながら、しかもそう繰り返した彼女の質問は奇妙なものであった。

——います。いますとも……。ですから、「青虫」に呼ばれて叱られてるんです。おお、貴方がお母さん……じゃない、姉さんではないのですか。何でも三輪達は何処かの子供を殴つたのだそうですから

ね。先刻、舎監室へ怒鳴りこんできた男があったが……あれは貴方の……何にあたるのでしょうか。おお、失礼……僕は時々話をとちるんです……。

寄宿舎風紀係は若い女性の前でかなり混乱したように喋った。然し、風紀係がそれ以上混乱する必要はなかった。二人の周囲に集ってきた学生達の一人が、矢場を迎えに行つてやろうと舎監室への使者を申出たとき、それを機会として、忽ち勝手な話題が、真面目な顔付にもどつて華かな少女を観察しはじめた寄宿舎風紀係を無視して、学生達の間に流れはじめたのであった。

矢場が吠えかかった犬を殴つたのだとか、その犬を追い廻すとき連れていた飼主の子供に怪我までさせたとか、公園での事件は或る程度まで知れ渡つていた。然し、一緒にいた三輪与志の名前は、彼等の話題に殆んどどのぼらなかつた。何かしらとりとめもない三輪与志をはばかりな気分が彼等の間に自然と出来上つていゝようであつた。

学生達の集団が次第に深まる好奇心のために殆んど陽気になつて矢場徹吾を迎えに來たのは、矢場徹吾と三輪与志が舎監室から出てきたばかりのところであつた。話を聞いて矢場徹吾は不審の色を浮べたが、癖である素早い足取りで校庭へ出て行つた。

校庭には既に薄闇が迫つていて、木柵の彼方のゆるやかに傾斜した小丘陵地帯の上に、仄白い最後の暈光が刷かれていた。夕暮の仄かな大気は周囲に顔えるように揺れてゐた。こんな風景は寄宿舎創設以來のことであつた。学生達の集団は悩ましいほどの静謐につつまれながら、既に木柵の彼方に立つた一つの影絵へ寄つて行く一つの丈高い影絵を眺めてゐた。やがて相對した二つの影絵は、傍觀者達の異常な注視の裡に、小丘陵地帯の裾へ溶け込むように消え去つて行つたのであつた。

その夜、人影もない寄宿舎の廊下を微かな音も立てずに、三輪与志の影が抜け出した。暗い校庭を通じて、講堂脇に建てられた小図書館の小階段を昇ると、彼は奥まつた一部屋の前に立つて内部を窺つた。

矢場徹吾の帰着も期待し得なくなつた真夜中近く、彼等の共通の友であるとはいへ、自身からは殆んどその姿を現わしてこない黒川建吉の閉じ籠つた小部屋へ彼は静かに入つて行つたのである。

凡ての寄宿生の義務として、寄宿舎外に寝起きすることは許されなかつたが、長い期間にわたる一種説明もなしがたいほどの固執の結果、黒川建吉は寄宿舎外の小図書館の一室内に一人住みこむ許可を得たのであつた。彼は医しがたい変人と見做された。放課後の大半の時間を図書館内に据えつけた彼は、就寝時間となつても寄宿舎内へ戻らなかつた。集団生活に約束された規定を無視した彼の態度は、はじめ鎮めがたい紛議を学内にもたらした。集団生活に於ける義務についての充分な説得が行われたし、また屢々、舎監自身小図書館へ足を運んで訓戒したが、凡てが徒勞に終つた。

寄宿舎からのみならず学校自体よりの放校と学校当局の態度が決定されかけたとき、主舎監である「青虫」が、彼のために弁護したのであつた。何処か他の暗い隅にある部屋ではなく、それが「青虫」にとつて最も重要なことであるが、この小図書館内へ執着した生徒の傾向はなにか未來を託するものがあると、主舎監には思われたのであつた。かなり変屈で、しかも屢々、狂熱的であることに於いて、学内でも有名であつた「青虫」が、なにかしら學問の本質を力説してみると、この異風な生徒を彼がいたわることにとも許容さるべき一つの理由があるような気が人々はしたのである。

しかも、この小図書館に備えつけられた書籍の大半は、「青虫」の異常な努力によつて蒐集されたものであつて、幾分偏奇的な趣味により、広範囲にわたつての選択はなされなかつたとはいへ、或る一定の専門的事項に關しては大学附屬の一図書館の書庫よりむしろ優れた稀覯本をも備えていたほどであつた。

かくして、黒川建吉は嘗て在学中の生徒には存しなかつた司書助手なる名称を附され、小図書館内への起居を承認されたのである。そして、寄宿舎に於いては一定の時間に消燈される不便がこの小図書館に